は，わざとそういう機会を作ってくれていたのかも知れない．

近頃は，原稿のワープロ化の一部を私が引き受けていたので，電話でお話しすることがときどきあったが，自分がやりたい課題を次々と口にされ，止まるところを知らなかった．他の方々にも，様々な抱負を語っておられたという．私も，津山さんのような戦前の世代でしか知らないいろいろなことを，是非とも文章に残すよう煽動していた．日本植物分類学会50年の歩みに書かれた「遠いあの頃の思い出」は，この線に沿った序章だったのだ．最近では，あまり顕彰されていない植物研究者の評伝を書くのだと，資料を集めておられたようだが，不発に終わってしまった．

前日まで平常の生活だったが，不調を訴えてからわずか9時間だったという．故人の固い遺志で，葬儀はごく近親者のみにより無典礼で行われた．何ものにもとらわれず，自由に生きた津山　尚博士89歳の，颯爽たる退場ぶりだった．（金井　弘夫）

新　刊

□織田秀実：**鈴懸の径から**　334 pp. 1999. 文芸社KK. ￥1,600＋税.

著者は動物発生学を専門とする学者であるが，植物学にも造詣が深く，長年に亘って培ったナチュラリストとしての鋭い観察眼と溢れるばかりの愛情をもって，身近な自然を見つめ，数々の優れたエッセイをものにしてきた．「鈴懸の径から」はそれらをまとめて上梓したもので，全編は5部から成り，第I部は「植物随想」で，著者が勤務した立教大学池袋キャンパスで接した樹木や花について文化誌的に綴ったもの，第II部は「動物随想」で，自身の研究材料淡水産コケムシにまつわるエッセイを主に収めてあり，第III部は数々の「旅行の思い出」の記を収録し，第IV部は「恩師への追慕」を語り，第V部は少年時代の体験的記憶を綴った「回顧」を収める．第I部の「植物随想」では，銀杏の雌雄，ライラック，ドッグウッド，アイビー，スズカケ，百合の木，マロニエ，定家葛，生垣のタチバナモドキ，フヨウとムラサキ，泰山木，紫陽花，梧桐，蘇鉄，アケボノスギ，セントポーリア，クリスマスツリー，柊など，扱う植物は約20種に及ぶ．ある時は正確な自然誌であるが，時に文化誌的であり，またある時は教育的見地からの語らいになるなど，読む者をして飽きさせない．自然に注ぐ著者のこまやかな愛情が全編に溢れる佳編である．

（千原光雄）

□佐藤　卓：**スイスアルプスの植物**　80 pp. 2000. 自費出版. ￥1,200（送料共）.

著者の手になる，114種の代表的な高山植物の美しいカラー写真が収められている．最後に日本の高山帯と比較した説明がある．A5版で薄手なので，スイス旅行の参考になるだろう．入手についての連絡先は次のとおり．〒939-[redacted] 富山市[redacted] 佐藤　卓.

（金井弘夫）